「歴史の再定義　旧ソ連圏アジア諸国・地方における歴史記述と歴史認識」の開催

本年度の東北アジア研究センター･シンポジウムは、「歴史の再定義」と題して、平成22年2月20日（土）～21日（日）に東北大学片平さくらホールで開催された。今回のシンポジウムは、共同研究「旧ソ連圏アジア地域の学術・教育におけるアイデンティティー再構築に関する研究」グループが企画・運営に当たったものである。

1990年代初頭の社会主義体制崩壊によるモスクワを中心とする放射状秩序の解体は、政治体制の転換に止まらず、唯物史観という発展史観を理論的基盤とした歴史認識上の根拠喪失と歴史的アイデンティティーの再構築をもたらした。本シンポジウムは、旧ソ連圏のモンゴル、ウズベキスタン、アゼルバイジャン、グルジア、ロシア連邦サハ共和国を事例として、体制崩壊後の歴史認識再構築の状況を比較検討した。各国別セッションでは、共同研究グループと当該国の歴史研究者の報告と中国史の立場からのコメントが行われた。

20日の第一セッション「モンゴルの事例」では、岡洋樹（東北大学東北アジア研究センター）「モンゴルにおける清朝支配期に関する歴史記述の変化をめぐって」が、社会主義期から民主化後のモンゴル公定の歴史記述における清代史記述を比較検討、社会主義期の歴史記述における唯物史観と民族主義の共存と、民主化後に後者が前面に出てきたことなどを指摘した。 ボル・プンサルドラム（モンゴル科学アカデミー歴史研究所）「1911年モンゴル民族革命の歴史記述」は、モンゴルにおける歴史記述を20世紀前半、1950～1990年のマルクス主義歴史記述の時期、1990年以後の改革期に分け、特に1911年のモンゴル独立に関する歴史記述の変化を論じた。 「ウズベキスタンの事例」では淺村卓生（東北大学大学院国際文化研究科）「ウズベキスタンにおける国家史と国家語」が、ウズベキスタンの国家語ウズベク語に関して、文字改革と正書法の変遷を、キプチャク･ハン国、ティムール朝、シャイバーニ朝に遡る同国の歴史認識と関連づけながら論じた。エルキン・アフンジャノフ（ウズベキスタン、タシケント文化大学教授）「新旧のウズベキスタン史」は、同国の歴史記述史を、バルトリド、ヤクボフスキー、トルストフらの著作に代表される20世紀初頭から1950年代までの時期、公定の歴史編纂を中心とする1950～1991年の時期、『新ウズベキスタン史』シリーズに代表される1991年以後の自立発展期に分けて回顧した。「アゼルバイジャンの事例」では黒田卓（東北大学大学院国際文化研究科）「『ギーラーン共和国』（1920～1921）をめぐる歴史と歴史認識――バクーとモスクワ――」が、1920年にミールザー・クーチェク・ハーンら率いるジャンギャリー運動によるイラン社会主義ソヴィエト共和国（ギーラーン共和国）と、これへのアゼルバイジャンにおける社会主義政権成立の影響についてソ連期と独立後の『アゼルバイジャン史』を比較しながら論じた。 ジャミル・ハサンル（バクー国立大学）「アゼルバイジャン民主共共和国の歴史記述――政治的状況と現実――」は、1918年から23か月間存在したアゼルバイジャン民主共和国に関する独立後の関心の高まりと、これに関する客観的な歴史記述がなされ始めていることが論じられた。

21日「グルジアの事例」では北川誠一（東北大学大学院国際文化研究科）「南コーカサスにおける言語政策・言語政治・言語外交」が、グルジアとアゼルバイジャンの少数民族に対する言語・教育政策を比較検討、国境を越えた言語・教育政策の実行が、地域の安定化に繋がる可能性を指摘した。ヴァジャ・キクナヅェ（グルジア、Iv.ジャヴァヒシュヴィリ歴史・民族学研究所）「グルジアにおける1924年蜂起の問題とソ連及びポストソ連期歴史記述におけるその評価」は、1924年にグルジアで発生した反ソ蜂起に関わる近年の歴史評価を取り上げ、1990年以後の研究や史料出版を回顧し、反乱に関する近年の議論を紹介

した。「ロシア連邦サハ共和国の事例」では高倉浩樹（東北大学東北アジア研究センター）が「歴史研究における政治と宗教：1990年代 サハ共和国におけるナショナリズム」と題して、1990年以後のサハ・オムクやサハ・ケスキレ、Kut-Siurなどの民族文化復興運動組織の活動、国家宗教「Ayi」の創設などの文化状況を論じた。アンドリアン・ボリソフ（ロシア科学アカデミー・シベリア支部人文学・北方民族問題研究所）「20世紀初頭以前のヤクート社会史に関するソ連および現代歴史記述」は、社会主義期における社会経済的関係や所有関係、階級闘争などに関する歴史記述を回顧し、大領主ティギンの評価を中心に、1990以後民族誌・フォークロア史料による文明論的歴史記述の動向を論じた。

最後に21日午後の総合討論では、上野稔弘（東北大学東北アジア研究センター）より、中国における時代区分・認識、民族主義的傾向の特徴が紹介された。

シンポジウムの報告と議論から、各国で民族主義的傾向をもつ独自の歴史認識構築が進んでいることが明らかになった。唯物史観の普遍性に対して、新しい歴史記述は、各国の歴史と民族文化の独自性を主張している。しかし、それが将来にわたって孤立した歴史認識として定着していくのか、あるいはより広い地域枠組みの中に自己の位置を見出していくのかは明らかではない。現地研究者の報告では、総じてソ連時代の歴史研究・記述への強い反省と、体制崩壊後の研究の新しさが強調された。その一方で各国の研究者が社会主義期の歴史研究方法から脱却しえていないことも指摘された。その意味で旧ソ連圏諸国の歴史記述はなお過渡期にある。ウズベキスタンやアゼルバイジャンでは、1920年代のソヴィエトによる介入以来のソ連支配への反発と、1920年代短期間に終わった独自の国家形成の意義が強調される。ロシア連邦構成共和国であるサハでは、エリートや知識人によるアイデンティティー構築が、特に文化面で進んでいる。これらの国々では、近代的民族・国家の形成自体がまさに批判の対象となっているロシア・ソ連の支配期と重なるという問題がある。モンゴルの民族主義的歴史記述はロシア以上に中国を意識する傾向があり、民族主義の構図がやや異なる。一方グルジアでは、数千年に及ぶ古い文明としての自己認識から、ロシア・ソ連の支配が評価されている。各国の歴史記述・認識の動向を一つの枠組みで理解することは困難だが、ソ連体制の歴史的意義を、これらの国々が「共有」する歴史研究の課題として、相互に比較しながら考察対象とする価値はあると思われた。（岡洋樹）

東北アジア研究センター・シンポジウム参加感想記

山下　正美（お茶の水女子大学・大学院生）

本シンポジウムで取り上げられた旧ソ連圏アジア諸国・地方における歴史記述・歴史認識についての知見は、今日、これらの地域を対象とする各分野の研究者にとって、必要不可欠なものであろう。筆者はサハの民族音楽を研究しているが、歴史記述・歴史認識の問題は、音楽学の分野においても同様に存在する。本シンポジウムでは、各国の専門の研究者・日本の研究者双方から具体的な事例報告を聞くことができ、研究のヒントを多く得られた。またマス・メディアを介さずに当事者たちの生の声を聞ける貴重な機会にもなった。

筆者の研究領域にも関連して特に興味深かったのは、淺村卓生氏の発表で、ここではウズベキスタンでの自国語表記が、ロシアとの距離感とも関係しながら、アラビア文字、ラテン文字、キリル文字へと切り替えられていく国家語史が報告された。特に、1934年の正書法会議で、チュルク諸語の共通項とされていた母音調和の表記が廃止されたという報告は、大変興味深かった。こうした問題は、音楽学の分野における音楽の記録の仕方や記譜法といった問題にも通じるものがある。

また各報告から、ソ連時代の歴史記述や歴史認識には、多かれ少なかれ、当局の都合の良いように解釈され、時には誇張されたり、抑制されたり、さらには偽造さえされた部分のあることがわかった。

社会主義思想の政権下には、音楽も国家の豊かさを示す指標として‘利用された’側面があり、資料の記述を鵜呑みにしてしまうと誤った解釈をしかねない。本シンポジウムを通して、ソ連時代に書かれた資料を批判的に検討する必要性・重要性も改めて感じた。

報告を行った各国の当事者たちからは、いずれも自分たちの言葉で、自分たちの歴史を語り、研究し、記述していこうとする姿勢が感じられた。これに対して、総合討論の時間には、「いまだロシアの枠組みを継承しているようにみえる」という意見も聞かれた。ここから、旧ソ連圏の国々にとってロシア・ソヴィエトの存在は、望む望まざるに関わらず、地理的にも避けがたい大きなシステムであり、恐怖を与える存在であるという事実もみえてきた。北方領土問題や拿捕事件など、日本もまた同種の問題をかかえているといえる。

本シンポジウムでは、旧ソ連圏諸国がどのような問題をかかえてきたのか（いるのか）、またそれらをどう解決しようとしているのか、様々な問題が浮き彫りになった。こうした問題をきちんと見据え、各国の参加者が率直に意見を出し合い、考察を深められたことは大変有意義だったと思う。この地域を研究する者の一人として、今後も各民族の抱えている問題に敏感になり、じっくり考える姿勢を忘れないようにしたい。